



0歳からの教育

楽で楽しい子育てのために

第六話

「伸びる子に育てる」子育て ①

ルソーの教育論、『福翁自伝』、モンテッソーリ教育法の共通点

この三者を並べて論じることは通常ありませんが、子育て・教育の本質に関して共通点があり、より良き子育てや教育を考える上で有益としますので私は敢えて行います。

教育には、大きく分けて、「教え込む」子育て・教育法と、子どもが本来持っている「発達しようとする生命力」を「引き出す (educate)」子育て・教育法があるのです。

「教え込む」子育て・教育法は昔から幅広く実践されていますが、知育偏重であったり、子どもに「きつく」「厳しく」「怖く」接する傾向があります。

一方、ルソーの『エミール』に始まる教育論、福澤諭吉の子育て観、モンテッソーリ教育法の子育て・教育は、「引き出す」子育て・教育で、「人には、本来自分を自ら発達させる力 (DNA) がある」という性善説に立ち、人的環境である大人の役割は「環境を整備し、環境との関わり方を示す」という立場です。また、「子どもには子ども独特の発達があり、子どもを矯める様な子育ては良くない」としています。

ルソー (Jean-Jacques Rousseau) の紹介 **子どもの発見**

18世紀のフランスの啓蒙主義思想家で『社会契約論』を著しました。

啓蒙主義思想とは、「人間は正しく考える力をもっている」とする考え方で、絶対王政や王権神授説を排除し、フランス革命を導いていく思想的な根拠となりました。

ルソーは教育論として『エミール』を著しました。

教育論として画期的だったのは：

- ① 教育の目標として「人間の自然性」という概念を持ち込んだ。(自然に帰れ！)
- ② 「**子どもの発見**」 当時子どもは単に小さな大人とみなされていました。
 - *子どもは小さな大人ではない。
 - *子どもには子ども時代という固有の世界がある。
 - *子どもには、子ども固有の成長の論理がある。
 - *成長の論理に即して手助けをするのが教育である。

以下『エミール抜粋、要約』

「知識を与える前に、その道具である諸器官を完成させよ。感覚器官の訓練によって理性を準備する教育を消極教育と呼ぶ。」

「考える力＝理性を育てる前に、感覚器官をしっかり育てなさい。3歳までは感覚器官を鍛え、特に身体を鍛えることを大切にいなさい。15歳くらいになったら判断能力を訓練しなさい。」

「判断能力を訓練する際に大切なことは実物教育である。実際に物を見ることによって知識を得る方法である。感覚器官から情報を得て、人間の精神の中に知識を獲得させる。それが実物教育になっていく。」

理解のためのキーワード

- 消極教育・・・人為的なものを排除する→「自然に帰れ」
- 実物教育・・・感覚器官を鍛え、実物教育を通じて正しく物事を理解する。
- 第二の誕生・・・第一の誕生が生物的な誕生とすれば、第二の誕生は社会的存在としての誕生である

ルソーの考えは、その後のモンテッソーリ教育法に繋がります。基本的にはルソーもモンテッソーリも、教育観の根幹は同じです。

モンテッソーリは、「教育とは人間の生命が本質的に持つ発達要求に基づき、環境を吸収しながら自ら伸びていこうとする潜在能力を引き出すこと」と主張します。これは、ルソーの主張する「人為的なものを排除する消極主義→自然に帰れ」という考えの上に立っています。福澤諭吉も『福翁自伝』の中で、「元来私の教育主義は自然の原則に重きをおいて」といっています。

モンテッソーリは科学者の視点でより体系的な教育法を造りだし、感覚教育を重要なものにとらえ、視覚、触覚、聴覚、味覚、嗅覚を研ぎ澄ますための具体的で膨大な教具体系も開発しました。これはルソーの「実物教育」を発展させたものです。どのような教具類があるのかご興味のある方は、ICE教室を一度覗いて下さい。

福澤諭吉の育ち、育て方 諭吉型人間はどの様にして育つのか

『福翁自伝』の中から幼児から15歳くらいまでの、子育て教育に関する部分を抜粋します。自然に子どもらしく育てて入ることが分かります。

a から g のカッコ内が、『福翁自伝』からの抜粋です。ご存知の通り、例年、慶応幼稚舎、慶応義塾横浜初等部受験においては『福翁自伝』を読んで、願書に所感を述べる必要があります。

以下、抜粋

- a. 「私が少年の時から家にいて、よくしゃべりもし、飛びまわり」
- b. 「またそのしつけ方は温和と活潑とを旨として、たいていのところまでは子供の自由に任せる。(中略) いかなる場合にも手を下して打ったことは一度もない。(中略) 一家の中ではまるで朋友の様で今でも小さい孫などは、阿母さんはどうかするところわいけれども、お祖父さんが一番こわくないといっている(中略) あまり厳重にせぬほうが利益かと思われる。」
- c. 「私は、はなはだきらいであったからやすんでばかりいて何もしない。手習いもしなければ本も読まない。十四か十五になってみると(略) 自分で本当に読む気になって(略) 会読をすれば、必ずその先生に勝つ。先生は文字を読むつもりでその意味は受取の悪い書生だから、これを相手に会読の勝敗ならわけない。」

ルソーの時代の公教育といえば、神学上の教義問答や修辞学のテーマを暗誦させることで、本来大人のために作られたカリキュラムをそのまま子どもに適用しただけのものでありました。それには、子どもの学びも、学ぶ楽しさもなかったのです。もちろん、子どもに適した本の読み聞かせは大切な子育て・教育です。しかし、子どもが興味を持ってない、理解も出来ないことを押し付けるのは、教育の陥穽^{}(かんせい)の一つです。この時期に大切なのは会話、読み聞かせによる「音声言語」です。言語であれ何であれ、乳幼児期の子どもは、**自分が興味を持ったことからのみ学ぶ**のです。諭吉は意味も分からず儒学の教本を素読するような、幼小期の学びを、無意味としているのです。

陥穽^{*} 落とし穴

*諭吉は貧乏下級武士の次男坊であったため、当時の教育システム(藩学校における厳しい儒教教育に組み込まれずに済み、のちの蘭学への道が開けました。また、儒教・仏教教育は、封建制度維持のために機能したのであり、新しい時代を切り開く人材を育成することは目指していなかったのです。当時の社会は変化を想定しておらず、現状を維持してうまく収める教育を儒教教育に求めたのです。

- d. 「さてまた子供の教育法については、私はもっぱら体のほうを大事にして、幼少のときからしいて読書などさせない。まず獣身なして後に人心を養うというのが私の主義であるから、生まれて三歳五歳まではいろはの字も見せず、七、八歳にもなれば手習いをさせたりさせなかったり、マダ読書はさせない。それまではただあばれしだいにあばれさせて、ただ衣食にはよく気をつけてやり、また子供ながらも卑劣なことをしたり賤しい言葉をまねたりすればとがめるのみ、そのほかはいっさいなげやりにして自由自在にしておくそのありさまは、犬猫の子を育てると変わることはない。すなわちこれがまず獣身をなすの法にして、幸いに犬猫のように成長して無事無病、八、九歳か十歳にもなればソコデ初めて教育の門に入れて、ほんとうに

毎日時を定めて修業をさせる。なおそのときにも体のことはけっしてなおざりにしない。世間の父母はややもすると勉強勉強といって、子供が静かにして読書すればこれをほめる者が多いが、私方の子供は読書勉強してついぞほめられたことはないのみか、私は反対にこれをとめている。」

*一見暴論の様に思えるが、福澤は「人の育ち本質」をついている。福澤の教育論と、ルソーの教育論『エミール』とは同じである。福澤も「自然の法則」を大切に、大人と子どもの世界は異なること、自然な環境が大切なこと、感覚教育が大切なこと、体験が大切なこと、遊びが大切なこと、を伝えている。

また、小学校低学年頃から勤勉性を身に付ける等、諭吉の生涯はエリクソンのライフモデルにも合致しています。

「脳育成学」の知見では、0歳～8歳までの発達に大切な環境は、E.E.E.（進化的に、期待されている環境）であると主張します。（教育コラム第二話 2p、図1 EEEの欠如 参照）EEEは進化の過程で、当然にして与えられている環境で、その環境と十分にかかわることによって子どもは正常に発達する。人とかかわり、自然とかかわり、自分の随意筋を動かす、生活とかかわり、知的好奇心を喚起する環境とかかわりの事です。

文字言語は、文化的に最近生み出されたもので、小学生になってから学ばよいのです。識字率は言語理解とは相関が低いと言われていています。焦らなくてもいいのです。豊かな言語環境、言語生活、生活体験が大切なのです。乳幼児期は、EEEの中で、思い切り体験し、人とかかわり、感じ、物事に興味を持ち、感性や、好奇心豊かな子、小さな随意筋、大きな随意筋を使う機会を沢山持ち、自分が自分の主人公になれる、自立型、自発型の子どもになる。人間としての土台を作るときなのです。

e. 「私は旧藩士族の子どもに比べてみると手の器用なやつで、物を工夫することが得意でした。（略）もとより貧士族のことであるから、自分でいろいろ工夫して、下駄の鼻緒もたてれば、雪駄の剥がれたのも縫うということは私の引き受けで、自分ばかりでない、母のも兄弟のも繕うてやる（略）」

*モンテッソーリ法では、子どもの発達は「目的を持った随意筋運動」にあります。

「目的を持った随意筋運動」は思考の一種であり、思考の前段階でもあるのです。目的を持った随意筋運動を行うために、頭（前頭連合野）の中で、作業の段取りをつけたり、組み立てたりするのです。小さな随意筋運動は生活巧緻性、大きな随意筋運動は指示行動等で受験考査でも診られます。

「お手伝い」も、この「目的を持った随意筋運動」に関連してきます。

乳幼児期における「目的を持った随意筋運動」の豊かな経験の積み重ねは、「自立型」の発達した子どもを育みます。（『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち』

～幼児の経験と脳～ 相良 敦子)

諭吉の、身辺に自立、お手伝い、創意工夫の工作等、目的を持った随意筋運動等はモンテッソーリ教育法と通じるところがあるのです。

先日あるシンポジウムで、「遊びについて」の海外の研究紹介がありました。その中で「最近米国大手の航空会社では、子ども時代に手を使って遊ばなかった人は、ハーバードやスタンフォードでどの様に成績が良くても採用しない。手を使っていない人は問題解決能力が低いから」(TCMの代表)

我々も「手順を踏む」等の表現を使います。手を使いながら、手順を踏んだり、工夫をしたりする繰り返しが、脳に「問題解決のプロセス」を沁みこませるのでしょう。

- g. 「稲荷様をあけてみれば、石が入っているから(略)代わりの石を拾うて入れておき、また、隣家の稲荷をあけてみれば、神体は何か木の札で、これをとって捨ててしまい(略)初午になって、幟を立てたり(略)ワイワイしているから、私はおかしい。」

*おおよそ「自立型」人間は、決められている与件、既存の考え方、権威にとらわれず、自ら本質を求めようとする。これはその表れといえる。

諭吉の幼少期の育ち方、子育てに関する考え方を調べますと、意外にもモンテッソーリ教育法が大切にしていることを実践しているのです。

ここでは、諭吉の幼小期の様子をもとに述べました、幼小期以降の諭吉の勤勉さやアイデンティティーを追求する活動も、エリクソンの言う「ライフサイクルモデル」に合致しています。

次回以降のコラムで、モンテッソーリ教育法が何故、各個人の全人格的成長をもたらすのか、脳育成学の知見も踏まえながら考えていきたいと思えます。

モンテッソーリ教育法に関する書物は数多くあります。ご興味のある方は先ず読みやすい本を購読してください。どの様な本が良いかは担当教師にお尋ねください。

ICE教室では、各種のセミナーがありますので、是非、教師からクラスの指導内容等は直接説明を受けて下さい。本教育コラムでは通常のモンテッソーリの解説書とは角度を変えてお伝えしています。

以上